三斎流
九曜会だより

発　行
三斎流九曜会
会長　小林祥泰
事務局　出雲市今市町53

熊本・泰勝寺跡（細川家菩提寺）に於て
三斎忌法要茶会・熊本復興チャリティ茶会を併催
宗浦家元による追善献茶式
細川護光様のご臨席を仰ぎ
平成二十九年十一月二十六日(日)

三斎公御霊前に献茶奉仕

泰勝寺跡山門

幽斎公霊廟

三斎公設計の仰松軒（こうしょうけん）

総合受付

○熊本県へ義援金を贈呈

平成二十八年四月、熊本県と大分県を中心に震度七を観測する地震が発生し、同地域に甚大な被害をもたらしました。

九曜会では、細川三斎公ゆかりの熊本で、被害に遭われた方々に少しでもお役に立てればと思い、この度、細川様のご協力を頂き、泰勝寺跡でお茶会を開催させて頂きました。

平成二十九年十月七日、八日に出雲市で行われた「いずも夢フェスタ」での熊本復興チャリティー茶席・熊本名産品の販売と、この度のチャリティ茶会での収益金の一部等を義援金として、十二月十八日、熊本県大阪事務所に贈呈しました。

贈呈・熊本大阪事務所

修復中の熊本城

三七三回遠忌となる三斎忌法要と、熊本復興チャリティ茶会を、細川家の菩提寺・泰勝寺跡で併催致しました。

細川護光様にご臨席を賜り、熊本や島根をはじめ、関東や関西、鹿児島等からの来場者が見守る中、宗浦家元による三斎公追善献茶式が厳かに執り行われました。

茶席は、濃茶席を九曜会、薄茶席と立礼席を翠尚会が担当。点心席では、細川護光様の奥様で料理家の細川亜衣様による創作点心が特別提供されました。

泰勝寺跡は現在、立田自然公園として親しまれており、細川幽斎公、三斎公をはじめ、歴代の熊本細川家藩主・奥方の霊廟や、三斎公の設計に基づいて復元された茶室「仰松軒（こうしょうけん）」があります。小雨の中、参加者は園内を散策し、霊廟に静かに手を合わせていました。

濃茶席

席担当の皆様

立礼席

薄茶席

「三斎忌法要茶会・熊本復興チャリティ茶会」に参加して

辰村社中　大國 優子

茶会の前日、バスと新幹線を乗り継いで、私共九曜会一行は熊本入りを致しました。熊本城の復興状況の視察や水前寺公園、小代焼窯元の見学を行いました。夜は全国から集った三斎流門人の交流夕食会に於いて、細川護光様から暖かいお言葉を頂戴し、大変感激致しました。

翌日の宗浦家元による三斎公追善献茶式は、細川家の菩提寺である泰勝寺跡の細川邸で執り行われました。全国各地からの参列者で会場は一杯になり、厳な雰囲気の中での献茶式となりました。

濃茶席は宗育宗匠が席主となられ、熊本とのゆかりのお道具のお話をしてくださいました。また、薄茶席は尚子先生が席主となられ、京都や東京での様子を私達にお話しくださいました。点心席は細川亜衣様の創作点心で、とても美味しく頂きました。そして、泰勝寺にある幽斎公や三斎公、ガラシャ夫人の廟所にもお参りし、私たちは熊本を後に致しました。この度は滅多に体験出来ないお茶会に参加させていただいて本当に有難うございました。

○三斎公三五〇年祭（平成七年六月）を振り返る

平成七年六月十一日、熊本市の水前寺公園内にある出水神社社殿にて、森山宗育宗匠による献茶奉仕が行われました。

細川家当主（当時）・護貞公御夫妻、護熙様のご臨席をはじめ、細川家御親戚の方々、肥後古流の方々を来賓に迎え、細川幽斎公が桂宮智仁親王に古今伝授されたという古今伝授の間に添釜を致しました。

昭和二十九年の東京国立博物館で、細川護立公を迎え三一〇年遠忌が行われ、これを期に十年ごとに三斎公の慈徳を偲び、茶会を行うことになりました。三二〇年遠忌は熊本泰勝寺、三三〇年遠忌は東京椿山荘、三四〇年遠忌は京都大徳寺高桐院で行ってきました。そして、平成六年十二月二十日に三五〇年遠忌が熊本水前寺公園出水神社で行われることになっていましたが、開催の一カ月前に宗瑞宗匠が急逝され、やむなく延期となりました。

細川護貞公御夫妻他

細川家より家元継承の認可を得た宗育宗匠は、宗瑞宗匠の思いを引き継ぎ、日取りも決まった翌年六月十一日に向け、宗育宗匠以下門人が一つになり準備を進め、本番を迎えました。

出雲より参加した百二十名の門人は、前日に熊本入りし、熊本城見学や県立美術館での「細川家の歴史と美術」を鑑賞。夜はホテルで細川家の史料等、考証に基づいて再現された「細川家古料理」を、細川公ご夫妻を囲み、料理長の説明を聞きながら賞味しました。翌日、無事茶会を終え、泰勝寺にお参りし、熊本を後にしました。門人一同、大変感慨深い茶会になりました。

宗育家元献茶

—第三回—

先達探訪

～三斎流の先生を訪ねて～

三斎流の先生、諸先輩方を訪問し、歩んでこられたお茶の道についてお話を伺うシリーズ「先達探訪」。三回目となる今回は、山崎智恵子先生です。

山崎智恵子先生を訪ねて

年が改まった一月中旬、陽が優しい穏やかな日に山崎智恵子先生宅にお邪魔しました。普段のお稽古場としても使われる宗瑞宗匠監修のお茶室に案内され、松風の声を聴きながらお茶を頂きました。その後、別間にてお話を伺いました。

◇三斎流との出会いは？

就職して一年ほど経った頃、祖母よりお茶を習ってはと勧められたのがきっかけです。実家の近所に観翠庵があり、祖母と一緒に観翠庵にご挨拶に伺い、入門のお許しを頂きました。

◇祥山宗匠との思い出は？

沢山ありますが、やはりお稽古の時の印象が特に記憶に残っています。例えば、頭の上に本を乗せているように歩くとか、姿勢についても両脇に卵を挟んでいる様な気持ちで、等と言われました。また、体を微動させないように、ここでは息を止める様にとか、茶杓を棗に置く際は槍を持ってスッと突き出す様にとか、わかりやすく表現されていました。今でもお点前の際には呼吸を意識する事があります。お点前をしている姿を鏡に映して自分の姿を見るようにしなさい、とも言われました。

祥山宗匠は、点前が違うとご自分の膝をパシッと手で打たれます。どこを間違えたか言われず、自分で考えなさい、と言われました。

お稽古以外の思い出も沢山あります。加茂の光明寺に何人か連れて行って頂き、私達が山で散策をしている間、祥山宗匠は色紙に絵を描かれ、後でそれを皆に分けて頂きました。竹田益州老師と一緒に京都で絵の学校に行かれていたので、絵がとってもお上手でした。祥山宗匠は厳しい面もありましたが、このようにとても優しいお人でした。

昭和二十九年に夏季講習会が峯寺で行われ、各社中代表がお点前をし、祥山宗匠と先生方の採点がありました。私が直門の代表としてお点前をし、稽古を始めて二年目でしたが、良く出来たということで、大徳寺の玉室和尚の墨蹟を頂戴致しました。当日の講師の彫刻家、内藤伸先生に箱表書付をして頂きました。

夏季講習で頂いた玉室和尚の墨蹟

結婚してお稽古を休憩していた時、（昭和五十二年）祥山宗匠が亡くなられたと聞きました。とても可愛がって頂いたのに、恩返しも出来ず、習いたい事もまだまだ沢山あったので大変驚きました。その年のお盆に宗瑞宗匠に再度お稽古に通うお許しを頂き、秋からお稽古を再開しました。

◇宗瑞宗匠との思い出は？

優しく大らかで体格のよい方で、町内が同じだったせいか親しみもありました。お点前を間違えると、優しく教えて頂きました。蝉結びが上手に出来なかった時、こうしたら上手に出来るよと優しく教えて頂きました。お掃除の時、一緒に草抜きをしては花の名前を教えて頂いたり、これはいらないから取ろうとか、色々教えて頂きました。修業中の話や、中国の老師の事をよくご存知でしたので、色々な事を勉強させて頂きました。仕事をしながらのお稽古でしたので、途中お休みもしましたが、何とか続けることができました。

退職後、本腰でお稽古しようと思った矢先、その日の午前中に宗瑞宗匠に二点前見て頂いた夜、突然お亡くなりになりました。とてもショックだったことを昨日の事の様に覚えています。

◇お茶を続けられた秘訣は？

お稽古に伺うとき、観翠庵に近づくと、ブルッと震えがくる感じで、シャキッとする緊張感が好きでした。その当時は、大野春栄先生と横井先生と一緒に夜習いに行っており、お稽古が終わると、帰り道で大野先生と一時間ぐらい立ち話をしました。お点前の復習をしていると、夜十二時になることもありました。それから帰ると、すぐに今日習ったことをノートに書いていました。そのノートも今では何十冊にもなっています。

◇心に残っているお茶会は？

福岡でのお茶会が印象に残っています。永青文庫からお道具をお借りする際、横井先生が永青文庫の方と一緒に傷の有無を確認し、あれば細かく記録されていました。お返しする際にも一つ一つお道具の傷等を確認して返されていました。貴重なお道具をお借りする際の扱いの作法を間近で見ることができました。

三斎公三一〇年遠忌の東京国立博物館・応挙館でのお茶会は、私にとって初めての大きいお茶会でした。また、三斎公三五〇年遠忌の水前寺公園でのお茶会では、お点前をさせて頂きました。

◇最後にひとことお願いします

祥山宗匠、宗瑞宗匠、宗育宗匠、宗浦家元と、四代の家元に仕えた事をとても誇りに思います。

そして、皆さんも三斎流を習っている事に誇りを持ってもらいたいです。大寄せで他流の方に合わせて、三斎流ではしない事をなさる方がいらっしゃいますが、それを見ると寂しい気がします。三斎流をやって良かったと思って頂きたいです。それと、お稽古して頂いている先生の言われる事を素直に聞き、素直に行う事が大切だと思います。習った事はノートにお書きになると、良いと思います。

特に若い方に頑張って続けて頂きたいと思います。途中、続けられない時や敷居が高い時、お茶を休まなくてはならない時がありますが、とにかく続けられる事を願っています。

◇山崎先生にご協力頂き、心より御礼申し上げます。先生の益々のご健康をお祈り申し上げます。

（広報部・川瀬清恵）

細川三斎の茶の湯の継承

和田 貞夫

九曜会のお茶会に参席した県外の客が、自分の知る三斎流の点前と少し異なるとの発言があったとの報告を聴いたので、茶の湯の継承について若干、記してみたい。

◆先人の足跡の継承

日本文化は昔から「よく先例を訪ね、重ねて新依を拓く」との格言の通り、伝統を尊重しながら、時代の流れに即応して未来への創造を成し遂げて発展してきた。

先人の足跡を大切にするところに日本文化独特の「道」が成立する。能楽などは、先人の足跡を繰り返し復習することが第一とされ、身体から身体へと伝えられて芸の基本を会得したのである。

茶の湯においても感覚に訴えながら知覚を働かせて先人の足跡を学びながら、道を拓いてきた。

千利休の孫の宗旦は「茶の昔今の能所を取て可致事也。昔の人も利休も其分也。能所取るは目きき、心をきかねばならぬ事也。」と述べ、昔の人も利休も皆、昔と今のよい所を書物の知識ではなく目をきかせ心して修業して自然に会得したものだと述べている。

この様に多くの茶人は、昔のよい所を継承しながら、歴史の流れに沿って個性を生かし、創意工夫に取り組んで今日に至っている。

◆黒と緑と白の茶

遠州流十三世小堀宗元家元が、三人の先人の茶の特色を、次の様に色で表現している。

千利休の茶は「わび・さび」という枯れた地味で深い趣きのあるもので、俗なものをすべて取り払い、削るだけ削って余分のない姿を追求した装飾性を排除した厳しい精神性の強い世界の茶で、彼は一切の無駄を省き、すべての色と包括する「黒色」を好んだ。しかし、秀吉は黒色を嫌ったため、やむえず長次郎に有名な「赤楽」を焼かせて用いたが、利休は「黒きは古き心、赤きは雑な心」と言ったという。

対して古田織部は、厳しい戦国の世に生きた大名茶人で強烈な個性の持ち主であり「破格」と呼ばれる茶の湯を生み出し、ゆがみのある奇抜な「緑色」の釉薬と抽象的な鉄絵で象徴される焼物を用いてお茶を点てたのである。

戦国の世が終わって江戸時代に入ると世の中が平和となり、人々は明るい安定した生活を望む様になって、ここに登場した小堀遠州は茶室を広く窓も多くして明るい空間を演出、個性より全体の調和を考えて多くの人から受け入れられる「白色」の高麗茶碗を好んで用いた。不安定な世から安定した世を求める時代となり、優美な装飾性を追究する「綺麗さび」と呼ばれる新しい美意識を象徴する白の茶碗を好んで用いたのであった。

利休・織部・遠州共に精神性の強い「わび・さび」の茶の湯の基本を根底に置きながら、生きた時代を背景に世情を反映する独自の創意工夫もあって、三人の特色が三色によく把握されている。青色と白色については、次の様な興味深い話が残されている。

抹茶の製法は、利休の時代から今日迄変わらず茶葉を摘んで蒸した後、乾燥させ茎や葉脈を除いて細かく砕いて石臼で挽いて作るが、織部は蒸さないでさっとゆで乾燥させて鮮やかな緑色にした。それに対して遠州は、色より味を重んじ昔の製法に戻したのである。これによって織部の「青茶」に対して遠州の「白茶」と呼び、今日では「〇〇の昔」「〇〇の白」という茶銘がよく用いられている。色より味を重んずる現在「〇〇の青」という茶銘は聞いた事がないが。

◆基本型と創意工夫

日本の伝統文化では必ず基本型があり、基本を大切にして厳しい稽古を重ねる事によって上達することが出来た。

茶道においても、歴史の流れに育まれ洗練されて生まれた点前・作法の基本を身体に覚えさせるために稽古を繰り返すことが求められている。

「稽古は一より習い十を知り、十よりかえる元の一」の言葉通り、一から学んで十を知り再び一に戻ると、そこから真の一が始まるのである。茶道には、目に見える型と見えない心の中の型があり、前者は稽古を重ねる事によって身につき、後者はその上に立って自身で把握するものであり、稽古によって先人の足跡を学んで自分なりに納得して心の中の型が身につくのである。この様にして茶の湯に対する美意識（好み）や工夫（作意）が生まれる。

千利休が茶の湯の極意について尋ねられて、唯にでも分かっている当たり前のことを自然に行うことが何よりも大切であると教えているが、あく迄も主客一体の自然な茶が基本となることが肝要で、時季と場所にあった創意工夫は認められるが、その根底には基本型とおもてなしの心がなければならないのである。

◆細川三斎の茶系

細川忠興（三斎）は乱世を生き抜いた抜群の戦国大名で茶道にも秀でた教養人であった。利休七哲の中でも三斎は、最も利休の教えを忠実に守った人であると言われている。

三斎流の茶系については、すでに記述しているので今回は簡単に復習することにする。三斎流は二つの流れに大別される。

一つは三斎を直接の流祖とはしていないが、肥後藩の茶道を受け持った「古風之茶道」を伝える古市家と菅野家、小堀家の三派で、その二は直接三斎に学んだ、江戸の一尾伊織が伝えたものである。

古市家一世の宗庵は、利休の婿円乗坊宗円に学んで三斎の三男忠利に仕えたが、これが肥後茶道の始まりである。菅野家一世正的は宗庵に学んで茶法を受けて藩の茶道頭となり、小堀家一世長斎も宗庵に学んで藩に仕えた。

これに対して一尾伊織は三斎の臣佐藤将監にお茶を学び、後に三斎から直接学んで茶法を成就し、ここに三斎を流祖とした、一尾派の三斎流が成立した。一尾派は稲葉駿河守正喬と米津周防守田賢の二つの流れに大別されて継承され

七回忌に制作された細川三斎像

一尾伊織
- 稲葉駿河守正喬……閑市庵荒井一掌……郎庵宗世―観翠庵初代祥山―二代宗瑞―三代宗育―四代宗浦
- 米津周防守田賢……高木主永正陳……舟橋希賢……高樋宗其

細川護貞公は「日本の茶家」（河奈書店刊）の中で二つの三斎流の流れを紹介し、他に三斎流と称する派があるとの話があるが確証できる資料がないので取り上げないと記述しておられる。

◆出雲に定着した三斎流

松江藩七代藩主松平治郷（不昧）は、最初に遠州流を十八歳の時には石州流の茶を学んでいる。

不昧が著述した茶書「むだごと」の末尾に「本意能く知りたる師匠に稽古したまえかし、只閑市庵の先生こそが余の意にも違うまし、此の先生に修業あれかし」と記し、家臣に三斎流を学ばせている。また、有澤能登に宛てた書簡の中でも「流派は違えども殊の外、大先生の様に披存候」と三斎流の荒井一掌を称揚している。

不昧と一掌の出会いは、江戸滞在二十数年の林久嘉の仲介であるとされており、久嘉は信州以来の譜代の臣で不昧付の侍医であってまた一掌について茶の湯を学んでおり、二人の出会いがなされたのであった。

こうして一掌は、松江の地を訪れて林久嘉の家を拠点として三斎流の指導普及に努め、出雲の地に三斎流が定着した。

松江市北田町の普門院には、住職恵海法印によって一掌好みの観月庵が建立され、恵海法印は三斎流の茶を学んで道統は普門院の住職によって継承されるが、その後安来市の清水寺の住職へ受け継がれ、やがて道統は観月庵九世郎庵宗世へと続く。その宗世の最後の弟子が観翠庵初代の祥山その人である。祥山は宗世に学んで修業を重ね、中伝の免許状を受けた時、師より観月庵の「観」と森山の森の「翠」の字を付けた「観翠庵」の号を賜り、ここに観翠庵初代祥山宗匠が誕生したのであった。

細川三斎公三一〇年遠忌と三二〇年遠忌の茶会の会記には、御献茶の栄を賜った祥山宗匠と同じく高樋宗其の名が確認できる。この後、祥山宗匠は細川家から正式に家元認可を授けられた。三斎流は名実共に出雲市に定着し、二代宗瑞・三代宗育・四代宗浦と順調に継承されていくのである。

先年、出雲文化伝承館の館長室の筆者の許に米子市在住の郎庵宗世の縁者と称する老夫婦の訪問があり、少々三斎流の茶を嗜んでいるので三斎流の茶席が懐かしく参席し訪れたとのことであった。

この様に山陰地方には、九曜会以外に三斎流の茶を嗜む人が米子市や安来市に在住するとの話を聞いた事が有るが、確証する資料がないので答えようがない。時代の流れと共に流派の伝承に移り変わりがあって、文頭の県外の参席者の言葉になったかと思われるのである。

◆武家茶道・鎮信流

先日、大田市内で石見銀山の世界遺産登録記念事業として鎮信流の茶会が開催され、盛会であったとの報道があった。石見銀山の銀は、その多くが平戸を拠点として海外へ輸出されており、その縁での釜掛となったのだという。

武家茶道・鎮信流は、平戸藩主二十九代松浦鎮信により石州流を基本として創始された。鎮信は名君の誉れが高く、詩歌に長じ片桐石州に師事して茶を嗜むが、晩年には一尾伊織と親交があり、三斎流の茶も学んだ。一尾伊織の茶は、この様に多くの茶人に影響を与えているのであった。

様々な流派が誕生し家元制度が確立、茶の湯が多くの人々に広がり世の中が安定してくると「利休の心」に戻れとの動きが興り、自然なおもてなしの心や一期一会の大切さが訴えられていく。そして明治・大正・昭和に入って豊かな日本文化の伝統の復興の動きが広まっていくのである。

◆「先例を訪ねて」の継承

千利休は、「常に茶は伶人の装束の様になりたがるもの也、事少ない仕舞がよき事也」（茶話指月集）と、茶の湯はともすると雅楽の装束の様に華美になりがちであるが、事少なに万事控え目に客と亭主が一体となった自然体で行うがよいと諭している。その根底には、常におもてなしの心が中核とならねばならず「事少なに」によって「わび」の茶が可能になるのである。

松平不味も「茶の湯は、稲葉に置ける朝露のごとく、枯野に咲けるおけるなでしこの様にありたく候、客の心になりて亭主いたせ、亭主の心になりて客いたせ、かたくるしき茶人は田舎茶の湯と笑ふなり、我流儀立つべからず。茶の湯に心を寄する人に送るもの也」（茶礎）といって、茶の湯は自然の姿を学んで伸び伸びと主客一体となって行うことが大切で堅苦しい茶人は田舎の茶だと言って笑われる、といって勝手に我流になってもいけない、利休の「わび」茶を目指して努力するようにと、茶の湯が心から好きな人に対して、その心得を指示している。

私達九曜会員一同には、細川三斎を流祖とする茶道三斎流の伝統をしっかり受け継いで「先例を訪ねて新依を拓く」の言葉通り「わび」茶の心を誠実に守って修業に励み、明日への発展に向かって精進せねばならない使命がある。

歴史の移り変わりは速く、生活様式も大きく変化していく今日、どの様に時代の流れにそって昔の能きところ生かして、新依を拓く茶の湯をいかに進めていくか、十分心してしっかりと考察すべき時期ではないだろうか。

九曜会事業報告

〈平成二十九年七月～平成三十年六月〉

○九曜会総会

平成二十九年七月九日(日)
ホテル武志山荘
担当　役員、事業部、直門（薄茶席）

平成二十九年度総会が、ホテル武志山荘を会場に盛大に開催されました。

小林祥泰会長、宗浦家元のご挨拶に続き、二十八年度の事業及び決算報告、二十九年度の事業計画、予算書の審議が承認可決されました。米寿の会員の紹介とお祝い、道場清掃の皆勤者の紹介等がありました。

午後は、楽山窯の十二代、長岡空郷氏による「楽山焼の歴史と技法 - 不昧公二〇〇年祭を一年後に控えて -」と題した講演が行われました。

長岡空郷氏

小林祥泰会長

○亀山茶会

献茶式　午前十時より
平成二十九年九月二十四日(日)

【濃茶席】
北島国造館　奥書院
担当　下垣・大野社中
来客者数　一六四名

宗瑞宗匠が五穀豊穣に感謝し、献茶されてから三十一回目の濃茶席を担当させて頂きました。

床には、護熙公の「本来人」を、お花はややご機嫌な酔芙蓉、亡き師匠のお道具を取り合わせ、逆勝手平濃茶の点前、今年、日本遺産に認定された「日が沈む聖地出雲」をイメージしたお菓子で、皆様をお出迎え致しました。

宗育宗匠から「大野先生もお喜びになっている」との労いのお言葉に胸が熱くなり、厳かな国造奥書院で無事ご奉仕を出来た事に、一同感謝致しました。関係された部会の皆様方ありがとうございました。

（下垣社中・下垣孝子）

茶席

奥書院　床

飾り付けを雲南らしくと考え、野山を歩き多くの秋草を集め、籠に里山の風情が出る様にと十五種を生けました。ご来席の方々が興味を持って下さった様に思いました。次回に向け、一同一層精進を重ねていきたいと思います。

（野々村社中・野々村和子）

【薄茶席】
北島国造館　亀山会館
担当　野々村・沼社中・加茂会
来客者数　一七八名

七年ぶりに薄茶席を担当させて頂きました。総会終了直後より色々考えを巡らせ、また、社中の多数の方にお点前をして頂きたいと思い稽古を積み重ね、緊張と不安の中で当日を迎えました。幸い好天に恵まれ、ご来賓の皆様方をはじめ、多くの方を迎える事が出来ました。

濃茶席 席担当

亀山会館 薄茶席

亀山会館 薄茶席

薄茶席 席担当

○三斎忌法要茶会
熊本復興チャリティ茶会

献茶式　午前十時より
平成二十九年十一月二十六日(日)
熊本・泰勝寺跡
担当　九曜会
来客者数　濃茶席　一二六名
　　点心席　一〇三名

熊本の細川家の菩提寺である泰勝寺跡で行われました「熊本復興チャリティ茶会」でお手伝いをさせていただきました。

当日は小雨模様の天気でしたが、細川護光様が見守られる中、宗浦家元様の献茶式が行われ、多くのお客様に参列いただきました。

今回のお茶会は濃茶席が九曜会、薄茶席と立礼席を翠尚会が担当しました。また、点心席ではこの度特別に細川護光様の奥様で料理家の細川亜衣様による創作点心が振る舞われました。

濃茶席には九曜会の方々はもちろん、熊本の肥後古流の方達もお席に入られ、三斎流のお点前に感心しておられました。

お茶会が行われた泰勝寺跡は、江戸時代に描かれた襖絵や装飾がそのまま残る大変趣のある建物でした。このような所でお茶会をさせていただき、とても貴重な体験になりました。

（直門・那須裕史）

茶杓　不昧公御作　銘 臙川老

荒井一掌筆「茶是一味禅」

○早春の茶会

平成三十年三月二十五日㈰
出雲文化伝承館　松籟亭
担当　佐藤・山本社中
来客者数　五六二名

軽やかな春の陽の下で、大勢の人々に参加頂きました。折からの桜開花に合せたように道具の取り合わせ、お菓子の工夫が揃い、テーマが絞れた事、あとは日頃から磨いてきた茶道の実践で、いかにおもてなしの心を繋いでゆくかの思いでした。室内席と椅子席との出し方の違いを決めた事は、時間と労力の向上に有効でした。茶席の常で双方の会話は最も少なくして、眼と味で理解と想像を広げてと願いました。また裏の方と運び方とが上手に連なり、先輩・後輩もどちらも無駄な動きがなく、疲れましたが充実していました。

（山本社中・山本ますみ）

高泉和尚筆
春光不在柳梢邊

○今岡美術館春の茶会

平成三十年四月二十一日㈯・二十二日㈰
今岡美術館　牡丹の間
担当　山田・加儀社中
来客者数　二一一名・二九八名

若葉が風にゆれる爽やかな季節に、第十五回今岡美術館春の茶会を担当させて頂きました。両日共に盛夏を思わせる暑さでしたが、沢山の方のご来席があり、盛況の内に終える事が出来ました。

茶席は牡丹の間で、床には「吹毛」が掛けられ、この茶席を担当することや日々のお稽古も研磨するひとつの方法である事を学びました。また、日々怠る事なく精進する大切さも感じました。

この春の茶会にあたり、計画・準備、当日と今岡美術館の皆様方には細やかなお心遣いを頂きました。改めて感謝申し上げます。

（山田社中・宮岡泉）

○新樹の茶会

平成三十年四月二十九日㈰
【薄茶席】
観音寺書院
担当　福間社中
来客者数　二四〇名

好天気に恵まれお客様も新緑の観音寺の庭を眺めながら、ゆっくりと一服していただけたように思います。ただ、気温も高めだったので蕾で用意した牡丹花が次々と開き、席が終わるまでに三回も入れ替えるという初めての経験をし、花の難しさを改めて感じました。

二四〇名のお客様をあまりお待たせすることなく出来たのは、九曜会からの協力と、社中の皆さんが十分稽古をし、一席一席丁寧にこなしてくれたお蔭だと感謝しています。

（福間社中・福間喜代美）

玉舟宗璠和尚筆「吹毛」

席担当

宙宝宗宇筆　円相ニ画賛

観音寺書院の薄茶席

【呈茶席】
観翠庵道場　松霞亭
担当　山崎社中
来客者数　二三二名

例年とは趣を変え、松霞亭での呈茶でしたが、三刀屋高校の生徒さんを始め、子供連れのお母さん、お一人でぶらりと来て下さったご年配の方等、幅広い年代の皆様にお茶室の雰囲気を味わっていただくことができました。

席を立たれる際には、「新聞記事を見て、初めてお茶席に来ました」「町の中にこのような静けさがあることに感動しました」等の感想を言ってくださり、お茶の心得のない方でも気軽にお茶を楽しんでいただけたことが、社中一同何より嬉しいことでした。準備等皆様のご協力に感謝申しあげます。

（山崎社中・森山由美）

松霞亭道具設え

○松江春茶会

平成三十年五月四日㈮・五日㈯
松江城山堀川川床
担当　大田・米子・安来本社中
来客者数　一三七名・一六六名

風薫る五月四日・五日の二日間、堀川の春茶会を担当致しました。

松霞亭

前日の夜の雨と雷の音でどうなる事かと思いましたが、当日はすっかり晴れて爽やかなお茶会になりました。四日は少し風も強く掛花入れのお花が揺れ、置き花入れが良かったかなと話したりしました。川床は眺めも良く時々通る遊覧船のお客様が和やかに手を振り合ったりされて、これもまた風情かなと思いました。

宗育宗匠・典子先生が御家族で足を運んでくださり、一同喜んでおりました。遠い所ありがとう御座いました。

（大田社中・岡田喜世子）

川床遊覧船の薄茶席

宗浦家元筆「無事」

○出雲大社茶会

平成三十年五月十五日㈫・十六日㈬
出雲大社　神苑
担当　直門・伊藤社中
来客者数　四九八名・四一四名

「風松竹揺是歓聲」と宗浦家元に書いて戴いた短冊の如く、神苑東野点席は、新緑に鶯の声と爽やかな風が参道の松林から心地良く吹き、本殿より聞こえて来るお囃子も出雲大社ならではの茶会となりました。お陰様で両日共に好天に恵まれ、平日としては沢山の方に来場頂き、席担当全員嬉しく思いました。又、今回各流派のお菓子も素材や色合が重ならないよう考えられ好評でした。五月初旬の天候不順の為、茶席の花を大変心配しましたが、担当以外の方からも珍しい花を頂き、七種類の花が一番席を盛り立てました事、感謝の気持ちで一杯でした。

（伊藤社中・高野明代）

野立の薄茶席

席担当

○講習会

平成三十年六月三日㈰
出雲文化伝承館　松籟亭
担当　研修部
参加人数　六四名

滴翠（したたる翠）の美しい伝承館にて、午前は「二畳台目」の研修。資料を元に研修部より台目棚の説明後、点前と客ぶりの研修を行いました。おおよそ、理解はして頂けましたが、客ぶり等に関し指摘を受けた事項も多く、お茶の稽古全般について考えさせられる事も多くありました。

午後は家元より、莨盆と風炉の灰の仕方について実習を混じえて講義をして頂きました。各自が持ち出した火入に灰を押し、悪戦苦闘しながら完成した灰の美しさに満足気でした。

充実した一日に感謝致します。

（研修部・錦織君子）

家元ご指導
莨盆と風炉の
灰の仕方

二畳台目の
模範点前

祝・米寿　おめでとうございます

九曜会会員の皆様の中で米寿八十八歳（昭和六年生まれ）の先生方をご紹介し、お祝いを申し上げます。

山崎智恵子先生（山崎社中）
樋野　幸枝先生（樋野社中）

☆末永いご健康とご多幸をお祈り申し上げます。

直門会研修旅行　京都・地蔵院　献茶式とお茶会

平成三十年五月二十七日、京都市西京区にある地蔵院で、宗浦家元による献茶式が行われた。式の後、翠尚会の皆さんによるお茶席も設けられた。

地蔵院は臨済宗の禅寺で、開山は夢窓国師。室町幕府管領の細川頼之が伽藍を建立している。

書院では、細川護熙公の筆による襖絵「瀟湘八景の図」（八面）と「瀑布図」（二面）を拝観することができる。

境内に竹林が広がっていることから「竹の寺」としても知られている。

襖絵　細川護熙公筆　瀟湘八景の図

地蔵院での家元献茶式

ご冥福をお祈り申し上げます

讃岐　孝子先生
（平成二十九年七月十三日）
嘉本　健二先生
（平成二十九年十一月五日）

☆長年に渡って九曜会顧問としてご尽力いただきました。